

大学入学共通テストの試行調査分析 (平成三〇年度)

広島なぎさ中学校・高等学校長 永尾 和子

第1問 記述式問題

■ 出典

鈴木光太郎『ヒトの心はどう進化したのか 狩猟採集生活が生んだもの』

(二〇一三 ちくま新書)

正高信男『子どもはことばをからだで覚える メロディから意味の世界へ』

(二〇〇一 中公新書)

川添愛『自動人形の城 人工知能の意図理解をめぐる物語』

(二〇一七 東京大学出版会)

■ 出典解説

二九年度のプレテストでは、第1問は実用的な文章だった。今回は比較的短い論理的文章をもちいた記述式問題が作成されている。前回の実用的な文章による記述式問題は、テキストの内容も設問も、中学生レベルの問題(全国学力テスト)とそれほど変わらない内容で、思考力・判断力・表現力というよりは、情報処理能力が問われている感が強かった。もちろん、現代社会において、情報処理能力は重要なスキルであるが、あくまで「スキル」であるという点が、国語科において扱いが難しいところであると思われる。思

考力・判断力・表現力とは、スキルよりも深いところに培われるものではないかという認識は、拭い去ることが難しいし、拭い去るべきものかどうか、まだ議論が必要であろう。

そこで、今回の問題は、第1問の記述式問題には論理的な文章を用い、実用的な文章は問2の評論の中に組み込まれ、従来のマーク式の問題の中で用いられた。ただし当然の結果であろう。なぜなら、前回のような平易な実用的な文章で記述式問題を作れば、どれほど凝った出し方をしても、深い思考を呼び起こすことは難しいからである。その点で、今回の作問は、明らかに前回の課題を踏まえて作られていると言えるだろう。

第1問は、言語に関する評論が二つ取り上げられている。驚くほど短く、文章自体はいずれも具体例を示しながらわかりやすく論じているので、それほど難しいものではない。しかし、ノンバーバル言語(指差し)が言語習得において、さらには文化の萌芽において、どのような役割を果たしているかという内容であり、抽象度はそれなりに高いので、言語論が苦手な生徒にとっては難しい問題に思えたかもしれない。

■ 設問解説

問1 【傍線部を説明する問題】（30字以内）

「指差しが魔法のような力を発揮する」とはどういうことか。という問いである。大学入試センターが示した解答例を見ると、正答の条件は次の三つである。

- ① 30字以内で書かれていること。
- ② ことばを用いない、または、指差しによるということが書かれていること。
- ③ コミュニケーションがとれる、または、相手に注意を向けさせるといふことが書かれていること。

まず、字数であるが、通常30字以内という場合、最低でも21字以上なければならぬと判断されることが多い。それは20字以内で書ける場合は、設問が20字以内になるからである。しかし、採点基準には「以内」しか示されていないので、たとえば「言葉を使わずに意思が伝達できること。」（18字）の場合も正答になり得るといふことだろうか。議論の余地があるように思う。また、この問いでは、「魔法のような力」が指し示す実際的な効果を問うていて、それがなぜ魔法と言えるのかまでは問うていない。従来、記述式問題の書き方として、たとえばこの問題の場合、魔法のような力の実質を述べるだけでなく、「魔法のような」という比喻表現を用いる理由まで説明するよう指導されることが多いのではないだろうか。しかし、この問いはあくまで「魔法のような力」とは、何（言葉を用いないこと・指差し）で、何ができる（意志の伝達・コミュニケーション）かを答えればよいのである。

確かに、「魔法のような」を説明しても、「あり得ない」とか「本当はできないことができてしまう」「信じられない」というような表現になって、そ

れは結局「魔法のような」という表現を置き換えただけに過ぎない。この問いでは、魔法のような「力」として実際に発揮されること、行為の内実を具体的にすることを求めていると考えなくてはならない。だから、30字以内なのであろう。比喻を説明していると、30字では入り切らない。また、採点の観点が分かれてしまい、採点も難しくなるに違いない。

問2 【文脈を整理した図式を補充する問題】（40字以内）

この問題は、形は文章を整理して図式化するという新傾向を意識した問題であるが、その図式化そのものは、あまりに平易で、中学校レベルと言われもしかたがないのではないだろうか。

図式が捉えているのは、第3段落と第4段落の冒頭だけであり、ほぼそのまま抜き出しても正答となることは、解答例からも明らかである。設問の冒頭では、「ヒトはどのように言語を習得していくのか」とあるが、もし、このままの問いで、文章Ⅱの内容をまとめれば、当然文章Ⅱ全体を整理することになっただろう。しかし、設問は、後半で、「子どもが初期の指ししによつて言語を習得しようとする一般的な過程を整理してみた」と限定されてしまった。おそらく、この問いにそれほど時間をかけることはできなかったからではないだろうか。その結果、次のような解答例も示されている。

（大人は）英語の先生がするように、本を手にとって「これが本だ」と教えてはくれない。

この解答は、「This is a book」を「これが本だ」に直ただけで、本文をそのまま抜き出したものである。

記述式問題を入れる目的は何か。ただ、情報を抜き出して並べるだけで、深い思考が必要ないのであれば、マーク式のほうがまだ考える時間がとれる

だろう。記述式を本気で取り入れるのであれば、記述式問題に一時間程度は必要なのではないか(ちなみにフランスのバカロレアの哲学の問題は、一問を四時間かけて解答する。もちろん記述式である)。

問3 【新しく発見した事例について、その理由を複数のテキストの内容をもとに説明する問題】(80字以上120字以内)

この問題は、言語論から記号論への「まことさん」の知識が広がっていることを意識した問題と言える。つまり、私たちは、言葉を習得する際には、指し示す対象物がそこになければならないが、習得してしまつと、対象物がそこになくても、言葉だけでコミュニケーションができるということである。紙にリンゴの絵を描いて、誰かにこれは何かと尋ねたら、まず誰もが「リンゴ」を答えるだろう。「白い紙と黒い線」と答えるのは、よほど遊び心がある者か、ひねくれ者である。もつともその人も、「白い紙と黒い線」という言葉は習得しているわけであるが。

つまり、言葉を習得すると、その言葉が指示するものが、必ずしも話し手が指示したいものと同じ視できないことがある。話し手は実際のリンゴを思い浮かべているが、話し手が紙に書いたリンゴの絵やリンゴという言葉は、実際のリンゴではない。しかし、それでも聞き手との間にコミュニケーションが成り立ち、聞き手は実際のリンゴを想像することができる。それは、私たちが他者(話し手)の視点に立つことができるからであり、他者(話し手)と同一のイメージを持つことができるからである。

まことさんは、リンゴの絵ではなく、地図上のある地点を例に挙げて説明する。前半は、地図上の地点を指した場合、話し手が思い浮かべているのは、地図上のある一点ではなく、実際の場所であるが、それを聞き手は理解することができるという内容が書ければよい。後半はなぜ聞き手はそれを理解できるのかを、文章Ⅰあるいは文章Ⅱの適当な部分を使って説明する。

それを指定された条件の範囲内でまとめればよい。

地図を例に使うことを設問に示さず、自分でその例を考え出すところまで要求できれば、さらに面白い問題になるだろうが、おそらく時間の制限があるため、難しいのだろう。

第2問 論理的文章・実用的文章

■ 出典

著作権に関するポスター

著作権法(抜粋) 二〇一六年改正

名和小太郎『著作権2・0 ウェブ時代の文化発展をめざして』

(二〇一〇 NTT出版ライブラリーレゾナント)

■ 本文解説

著作権に関する資料二種類と文章が取り上げられているが、文章に関する問いが大半を占めるため、平成二九年度の第1問のように、資料を丁寧に読む必要はない。まず、文章を読んで問いに答えながら、必要に応じて資料を用いるという解き方でよいだろう。

著作権は、知的財産権の一つとして、現在注目されている権利である。きちんとした知識を持っていなければ、トラブルのもとになる。名和小太郎の文章は次のような構成になっている。

①④ 著作権法が定義する著作物とは

← 原作品のなかに存在するエッセンスⅡ記号列

複製物にも及び、破壊・消失等しても存続する

5
7

著作物の定義と叙情詩モデル【表1】

著作物の定義は叙情詩をモデルにしている

←

理工系論文や新聞記事は排除される要素を含むが、無方式主義の原則によって著作物となる場合がある

9
12

抒情詩型テキストと理工系論文型テキスト【表2】

抒情詩型テキスト：「私」「一回的」「主観的」

表現の希少性は高い

⇕

理工系論文型テキスト：「誰でも」「万人」「普遍的」

著作権法によってコントロールされない

着想・論理・事実・アルゴリズム・発見に価値がある

多くのテキストは叙情詩と理工系論文とを両端とするスペクトルのうえにある

13
14

表現／内容の二分法

どんな著作物も表現と内容を二重に持つ

⇕

著作権法は、テキストの表現に注目し、その希少性によって著作権の濃淡を判断する

←

侵害の有無を判断する

15
18

利用／使用の二分法

著作権の利用行為は多様である【表3】

そのまま、複製、移転、二次的利用

⇕

著作権の使用については著作権は働かない

書物の閲覧、建築への居住、プログラムの実行

利用と使用の二分法がないと、著作権のコントロールの過剰を招き、社会生活が抑圧される

ただし、利用と使用の判断基準は明らかではなく、区別が困難な場合がある

■ 設問解説

問1 【漢字の問題】

前回は小説で漢字の問題が三問出題されたが、今回は従来のセンター試験の形式を復活させている。正答率もほぼ例年のレベルに戻っている。

(ア) 合致 ①致命 ②報知 ③稚拙 ④緻密 ⑤余地 (正答率 83・4%) 正解は①

(イ) 適合 ①匹敵 ②適度 ③水滴 ④警笛 ⑤摘発 (正答率 87・4%) 正解は②

(ウ) 両端 ①丹精 ②担架 ③破綻 ④落胆 ⑤端的 (正答率 74・7%) 正解は⑤

(エ) 閲覧 ①欄干 ②出藍 ③乱世 ④一覽 ⑤累卵 (正答率 74・0%) 正解は④

(オ) 過剰 ①剰余 ②冗長 ③醸造 ④施錠 ⑤常備 (正答率 50・0%) 正解は①

漢字の問題は、語彙力を問う問題でもある。(オ)の過剰はよく使う表現であり「剰」の字は容易に思い浮かべられるはずであるが、選択肢の中の語句のうち、「剰余」「冗長」の意味がわからない生徒がいたのではないだろうか。(エ)の「出藍」「累卵」も生徒には難しい語句だが、正解ではないため、正答率はそれほど下がっていない。しかし、(オ)の場合、①剰余が正解の選択肢であったため、正答率が下がってしまったと考えられる。

漢字の問題は、これまでの習慣のせいもあるだろうが、やはり文学的文章よりは論理的文章で出題したほうがよいのではないだろうか。出題者側にとっても、そのほうが出しやすいはずである。

問2 【傍線部の具体例を選ぶ問題】 (正答率41.9%) 正解は④

「記録メディアから剥がされた記号列」における「記録メディア」とは、紙、カンバス、空気振動、光ディスクなど、作品を載せている実態である。そこから剥がされた記号列とは、まさに著作者がそうした記録メディアに載せて発せようとする思想や感情である。第1段落から第4段落で述べられている内容をきちんと把握していれば、それほど難しい問題ではない。正解は④である。

その他の選択肢は、すべて記録メディアの例である。

問3 【文章との内容合致問題】 (正答率39.4%) 正解は⑤

内容合致問題は、選択肢と本文を照合しながら、選択肢の内容を吟味する。句読点で区切りながら吟味すると、他の選択肢と比較しやすい。

① 「著作者の了解を得ることなく行うことができる」が誤り。著作者の了解を得なくてもよいのは、「利用」ではなく、使用である。よって、この

選択肢は誤り。

② 「新聞記事や理工系論文は除外される」が誤り。「新聞記事や理工系論文は除外されやすい」とは書いてあるが、完全に除外されるわけではない。無方式主義によって、除外されるものも著作権法が認めてしまう場合もある。したがって、この選択肢も誤り。

③ 著作権訴訟において侵害の有無を判断するのを「二分法」というが、これは「表現／内容の二分法」であり、「叙情詩型」と「理工系論文型」という二分法ではないので、この選択肢も誤りである。

④ 「遺伝子のDNA配列のように表現の希少性の低いものも著作権法によって保護できる」が誤り。遺伝子のDNA配列は、著作権法では保護されない。

⑤ 著作権法が表現と内容のうち、表現に注目し、表現の濃淡によって、著作権の侵害の有無を判断しているという本文の内容と一致する。よってこれが正解。

問4 【複数の表を対比してその違いを説明する問題】

(正答率31.1%) 正解は④

この問題は、表1、表2および文章を統合して、選択肢の内容と照合していく必要がある。「テキスト全体を通じて対比されている事項について考察し、共通点や相違点を整理することができる」力を養うというねらいに合致した問題と言えるだろう。平成二九年度の問題は、形式や設問のしかたに新しさを出していたものの、このようにテキスト全体を読んで考察するという問いがほとんどなかった。その点で、思考力・判断力を深める問いとして工夫が見られる。

① 後半の「表2では『テキストの型』の観点から表1の『排除されるもの』

の定義をより明確にしている」が誤り。表2は、「テキストの型」の観点から、「叙情詩型」と「理工系論文型」のテキストの定義を明確にしているのである。

② 前半の「『キーワード』と『排除されるもの』の二つの特性を含むものを著作物とする表1」が誤り。「排除されるもの」とは、著作物から排除されるのであるから、著作物の特性にはなりえない。

③ 「『キーワード』や『排除されるもの』の観点で多様な類型を網羅する表1」が誤り。表1は、キーワードを示して著作物となるものと、排除されるものを整理している。また、後半の「著作物となる『テキストの型』の詳細を整理して説明」も誤り。理工系論文型テキストは、著作物から排除されやすいものであるから、一様に著作物の中に含めることはできない。

④ 表1、表2の説明とも、文章の内容に合致している。よってこれが正解。
⑤ 後半の「叙情詩型と理工系論文型との類似性を明らかにして」が誤り。両者は両極端のものであって、類似性はない。

問5 【文章の表現効果を問う問題】

(正答率17・1%) 正解は①

第2問中、最も正答率が低い問題となった。表現効果の問題は従来から受験生が苦手とする問題と言える。また「適当でないもの」を選ぶという問い方も苦手とする生徒がいるため、正答率が低かったものと思われる。

①は「何らかの実体」「物理的な実体」は抽象的な表現だが、「——」に続く「記録メディア」「複製物など」は、より具体的な語句になっている。つまり「——」には直前の語句を補足して説明する効果があるのであって、強調を目的としているわけではない。この説明は適切でないため、①が正解となる。その他の選択肢の説明はすべて妥当である。

何を書くかではなく、どのように書くかが重視される問題が出題されるよ

うになってから、すでに十年は経過している。ことばの一つひとつ、記号に至るまで、表現に込められた筆者の意図や思いを読み取ったり、感じ取ったりする訓練が日頃から重視されなくてはならない。

同じ言葉、記号も、状況や使うタイミング、登場人物の心情の変化など、様々な条件によって異なる意味や働きを持つ。表現効果は文章の内容や構成とも強い関連がある。単にその言葉や記号が用いられている箇所だけに着目するのではなく、文脈を読み取ることが大切にしてほしいものである。

問6 【著作権の例外規定に該当するものを選ぶ問題】

(すべて正答44・3% 二つ正答31・6% 一つ正答14・9%)

正解は② ④ ⑥

冒頭の著作権に関するポスターの空欄に、著作権の例外規定に該当するものを入れる問題である。著作権を知っている者にとっては、資料Ⅱの著作権法を読む必要がないくらい、自明のことが書いてあるが、一般的な高校生は、著作権について実際のところはほとんど知らないのではないかと考えられる。

したがって、資料Ⅱの著作権法の抜粋および文章を参考にして、選択肢の正誤を判断していく必要がある。

① 第4段落で「かりに原作品が壊されても盗まれても、保護期間内であれば、そのまま存続する」とある。パロディにする場合も原作品の著作権は残るので、例外にはならない。

② 「著作権法第三十八条」に、例外規定に該当すると書いてあるので正解である。

③ 「誰でも容易に演奏できる曲であれば例外になる」とは、どこにも書かれていないので、この選択肢は誤り。

- ④ ②同様、「著作権法第三十八条」の例外規定に該当する。
- ⑤ 文化の発展に寄与することは、著作権法の目的の一つであり、そのために著作者の権利の保護を図るのである。文化の発展を目的とした演奏会であつても、演奏する曲及びその演奏は当然著作権で保護されている。
- ⑥ やはり②同様、「著作権法第三十八条」で、例外であることが明記されている。
- よつて、②④⑥が正解である。

第3問 文学的文章

■ 出典

吉原幸子 「紙」(『オンディーヌ』一九七二 思潮社)

「永遠の百合」(『花を食べる』一九七七 思潮社)

■ 本文解説

同じ作家の詩とエッセイが出題された。センター試験の小説は五千字を越えるような長文が出題されてきたが、これほど短いテキストは初めてである。エッセイも詩に近い内容・表現の作品で、文学的文章については、今後も様々なジャンルの文章が出題される可能性がある。

書物は一冊も書いていないボブ・ディランがノーベル文学賞を受賞するの、も一つの象徴的な出来事かもしれない。文学とは何か、その探究が始まっているような予感もする。

「紙」は、かつての恋人からのラブレターだろうか。すでに恋人の実体はなくなつてしまひ、愛も消えてしまつたのに、いのちのない薄い紙一枚がいつまでも残つている。そんな紙よりも滅びやすい自分が、何百枚もの紙に作

品を残そうとすることを、「いのちといふ不遜」と詩人は書いている。

死のように生きる、命のない紙のように生きればいいのかもしいないが、それでも滅びゆく運命と知りつつ、詩人は生きて表現することを選ぶ。それが「乾杯」なのであろう。

「永遠の百合」もまた、死にゆく命である自分の感性を、言葉によつて永遠に残したいという強烈な思いがほとぼしるエッセイである。どちらの作品も、いのちと永遠、ことばと感性が、自己内対話のような表現形式で語られている。

■ 設問解説

問1 【語句の意味の問題】

(正答率) (ア) 39.8% (イ) 39.4% (ウ) 39.1%

正解は (ア) ⑤ (イ) ④ (ウ) ③

第2問の論理的文章で漢字の出題形式がセンター試験の形で復活したように、第3問の文学的文章では、語句の意味の問題が復活している。やはり、基礎的知識を問う問題も必要という判断だろうか。漢字が論理的文章で出しやすいように、語句の意味は文学的文章のほうが出しやすいはずである。

(ア) いぶかる 正解は⑤ 「疑わしく思う」

(イ) 手すさび 正解は④ 「必要に迫られたものではない遊び」

(ウ) いじらしさ 正解は③ 「けなげで同情を誘う様子」

正答率はいずれも四割を下回っている。「いぶかる」「手すさび」は生徒にとつては日常語ではないだろう。特に「いぶかる」は詩の一節なので、前後からヒントを得られにくかつたのかもしれない。

しかし、「いじらしさ」は、日常生活で耳にする言葉ではないだろうか。

また、選択肢を見ても、③以外は「いじらしさ」にはほど遠い説明である。この問題が、語句の問題三問の中で、一番正答率が低いのはなぜか。傍線部(ウ)の直前は、「心をこめてにせものを造る人たちの、ほんものになかないという(いじらしさ)」となっている。もしかしたら、この説明に影響され、②の「自ら蔑み萎縮している様子」を選んでしまったのだろうか。語句の意味の問題が、今後もこの形で出題されるかどうかは不明だが、少なくとも辞書的な意味を無視して文脈に恣意的に挟み込むことはできないことを肝に銘じる必要がある。

問2 【詩中の表現について、その理由を問う問題】

(正答率 59.5%) 正解は②

「不遜」とは、「謙虚でないこと」「身の程を知らない」「思いがついていること」「自分を偉いと考えて、相手を見下すこと」という意味を持った語句である。たとえば、「新人のくせに、先輩を見下すような発言をする不遜なやつだ」などのように使うことができる。薄っぺらな一枚の紙にも及ばない命と心しか持たない人間が、何百枚という紙に自分の感性を書き記すことを、身の程知らずで「不遜」と感じているのである。このことを的確に説明している選択肢は②である。②以外の選択肢では、実はちっぽけなものに過ぎないのに、大きなことを言ったりしたりするという「不遜」の意味が十分に伝わらない説明になっている。

① 「不可能なことであっても」「あたかも実現が可能なように偽る」という説明が誤り。実現不可能なことを自分しかできないという大きな態度を取るのであれば「不遜」と言えるだろうが、「不可能なことを実現可能なように偽る」のであれば、嘘つきや不誠実とは言えるが、「不遜」とは言えない。

③ 詩の中のどこにも「心の中にわだかまることから解放」されたいという思いは読み取れない。また、「解放されると思い込む」ことを不遜とは言えない。
④ ①とほぼ同様の内容の選択肢である。空想を実体として捉えたかのように見せかけることは、虚飾であって、不遜ではない。
⑤ 「滅びるものの美しさに目を向けず」が誤り。「永遠の百合」も踏まえると、作者は滅びるものの美しさ、重みを知るからこそ、その一瞬を残したいと思っているからである。

問3 【書き手の心情を考えて傍線部を説明する問題】

(正答率 64.7%) 正解は④

「つくるということ」については、前後を読むと「枯れないものは花ではない。それを知りつつ枯れない花を造るのが、つくるということではないのか」となっている。また、第3段落には、「人間が自然を真似る時、決して自然を超える自信がないのなら、いったいこの花たちは何なのだろう」とあり、さらに第5段落で、「花でない何か。どこかで花を超えるもの。：：ひと夏の百合を超える永遠の百合。それをめざす時のみ、つくるといふ、真似るといふ、不遜な行為は許されるのだ」と述べられている。すなわち「つくるということ」は、花でも何でも、それを真似る、つくるときには、それを超えたものを作り出すことだということがこれらの表現から導き出せる。このことを的確に表している選択肢は④である。

① 「対象があるがままに引き写し、対象と同一化できるものを生みだそうとする」が誤り。対象を超えようとしないうことは「つくる」とは言えない。
② 「対象を真似てはならないと意識」「にせものを生みだそうとする」がいずれも誤り。「真似る」も「つくる」も対象を超えようとするのであ

るが、それはにせものを造るということではない。

- ③ 「あえて類似するものを生み出そうとする」が誤り。対象を超えたものを造ろうとしなければ「つくる」にならない。また、そのとき人間は不遜になることが許されると言っているので、「謙虚な態度で向き合いつつ」も適当ではない。

- ⑤ 「個性を發揮し、新奇な特性を追求したものを生み出そうとする」が誤り。本文には書かれていない内容である。

問4 【本文の内容を踏まえ傍線部の表現効果を説明する問題】

(正答率 46・8%) 正解は②

「在るといふ重み」については、第6段落で「個人の見、嗅いだものをひとつの生きた花とするなら、それはすべての表現にまして、在るといふ重みをもつに決まっている」と述べられている。

つまり、生きている個人がそのまま一つの生きた花となるのであれば、それはどんなすばらしい表現(絵画や詩など)も及ばない。なぜなら、それは実物そのものであり、命の重みを宿しているからである。したがって、「在るといふ重み」とは、実物の存在の重みであり、実物の中にあるかけがえない命の重みであるということが出来る。

もちろん、人間は、そのまま「花」になることは出来ない。だが、絵や言葉によって、自分の一瞬を枯れない花にできないか。作者は表現によって、実物を超えることを渴望しているのである。

- ① 「時間の経過に伴う喪失感の深さ」は、本文には述べられていない。また「喪失感」と「存在」は相容れない概念である。

- ② 表現ではなく、実物そのものに備わるかけがえのなき、すなわち存在の重みを言い表している。したがって正解である。

- ③ 「感覚によって捉えられる個性の独特さ」とあるが、これも本文には述べられていない。また、「個性の独特さ」と「在るといふ重み」には一致するものがない。

- ④⑤ ③と同様本文に述べられていないし、「在るといふ重み」、すなわち、実物の存在を表していないので、誤りである。

問5 【作者の心情の変化を説明する問題】(正答率 55・1%) 正解は④

作者は、何とかして、ことばによって、自分の感性を永遠に残したいと考えていた。花を真似ながらも、花を超えた何かを表現することで作り出したという思いを持っていたのである。

しかし、興奮が冷めると、作者は死なないものは命ではないという真理を思い出す。命あるものは必ず死ぬのであり、それとともに感性も滅びてしまうのである。限りある時を超えて何か(花や詩などの作品)を残してもしかなかった。いずれはすべてなくなっていく。

作者は、友達にもらった百合を結局捨てなかったが、秋を通り越して百合を残すことに「うしろめたさ」を感じている。それは、言葉を残し、作品を残そうとしている自分に対する後ろめたさでもある。このような作者の心情を説明している選択肢は、④である。

- ① 「造花も本物の花も同等の存在感をもつことを認識した」が誤り。作者は本物の花を真似ながらも、本物を超えるものを造ろうとしていたので、「同等の存在感を持つ」とは認識していない。

- ② 「日常の営みを永久に残し続けることにもある」が誤り。筆者は「私の永遠はただかかと三十年でよい」と言っている。人間は誰も永久に生きることができない。

- ③ 「花をありのままに表現しよう」がまず誤り。作者は、花を超えたもの

を造りたいと思ったのである。超えたものを造るからこそ、表現することが許されると考えている。

⑤ 「友人の好意を理解もせずに、身勝手な思いを巡らせている」が誤り。筆者は第7段落で友人の言った「秋になったら捨てて頂戴ね」という言葉の意味を理解しているし、そもそも筆者が百合を契機として巡らせている思いは、いのちと永遠に関する哲学的な問題であって、友人の好意を顧みず、身勝手なことを考えていたという気持ちになって「さめた」わけではない。

問6 【テキストそれぞれの表現効果について説明する問題】

(i) 詩に用いられている修辞について問う問題

(正答率 22・1%) 正解は②

説明する一文の空欄に修辞法を組み合わせるという形式は、今まで出題されることがない。

aのうち、①「擬態語」はない。②「倒置法」は、一連と二連が倒置になっている。③「反復法」は、「乾杯！」の語や「生ければ」が繰り返されている。④「擬人法」は、「紙片がしらじらしくありつづける」とか、「いのちが青ざめそして黄ばむ」で用いられている。

そこで、①③④のbを見ると、③「帰納的」④「構造的」は、いずれも該当しない。②「反語的」は、第一連では、どうして恋人は去ったのに、彼が残した紙は残っているのだろう、残らなければいいのという思いで始まるが、やがてその思いは、薄っぺらな一枚の紙がこころよりも長持ちするという驚きと不思議の念に捉え直され、その紙よりもほろびやすい自分が、何百枚という紙に書きしるすことを不遜と言いながらも、命の限り紙に書き続けようという思いになっていく。したがって、第一連に示される思いを反語的に捉え直しているという説明は成り立つので、正解は②である。

(ii) エッセイ中の表現の特徴を四択で選ぶ問題

(正答率 33・7%) 正解は①

センター試験でもよく出題される形式である。一九九年のプレテストに比べ、かなりセンター試験への回帰がみられるが、形式はともかく、表現の特徴は必ず出題されるであろう。いつもテキストの表現に着目して読む習慣を身につけたいものである。

① 確かに、「たった一つできないのは枯れることだ」を前に置くことによって、「たった一つできるのは枯れないことだ」という表現が引き立ち、「枯れない」という造花の欠点が、「できること」というプラスに変わっているのが、説明として矛盾点がなく正しい。よってこれが正解。

② 「第三者的な観点をを用いて『私』の感情の高ぶりが強調」とあるのが誤り。第三者的な観点は用いられていない。

③ 「もどす」の前後にある「——」は、直前の「何かに変える」を言い換えるために用いられているので、「『私』の考えや思いに余韻が与えられ」るわけではない。

④ は、「『永遠』という普遍的な概念を話題に応じて恣意的に解釈しようとする」が誤り。作者は「永遠」の概念を恣意的に解釈はしていない。

第4問 古文

■ 出典

紫式部『源氏物語』手習

■ 本文解説

二九年度のプレテストでは、古文は『源氏物語』の写本が二種と『原中最秘抄』という、三種類のテキストが問題文になっていた。二九年度は全体的に情報量が多く、十分に生徒が読み切れないという結果が見られたため、三〇年度は各大問で様々な変更・工夫が見られる。古文は、本文は従来と同じような種類の文章に戻り、長さもセンター試験とほぼ同じ程度になっている。ただし、問5で「手習」中で浮舟がつぶやいた「かかれとてしも」の句の引き歌として、僧正遍昭の『遍昭集』の一節が引用されている。ただし、『遍昭集』の引用部分から直接問うのではなく、僧正遍昭の出家時の心境と「手習」における浮舟の出家する心境の類似点、相違点について、生徒達が話し合いをするという設定を作り、妥当な意見を選ぶという問題が出題されている。これは複数の文章を必然的に理解した上で、妥当な解釈について考察をしなければならぬ点で、出題のねらいが十分に生かされた設問になっていると言えるだろう。

二九年度のプレテストでは消えていた語句の意味の問題が問2に復活している。問2、問5以外は、解釈の問題であるが、従来の問題や二九年度のプレテストでは、傍線部に関する問いにしろ、文法・表現問題にしろ、限定された場所から解答を作ることができた。その点で、前回の問題は、出題のしかたこそ目新しかったが、問い方については従来の問題に近かったと言える。今回の問題は、文脈やテキスト全体を読まなくてはならないような問方がなされており、その点でも、出題のねらいを強く意識し、かつそれがある程度実現している問題になっている。この改善努力は注目に値する。なぜな

ら、二年後の本番までに、より一層の改善が図られると予測されるからである。

ただし、今回の問題の程度であれば、語彙力・文法力に支えられた読解力があれば、多少設問形式が新しくなっても解答するのに困難はない。問5の場合も、本文と遍昭集の詞書きの内容を読み取れば、生徒たちの会話の正誤はすぐに判断できる。

もし、もつと手応えのある現代文の文章（たとえば小林秀雄など）が組み合わさったり、対話文の読解にも工夫が凝らされたりして、複数の文章の読み比べや文脈やテキスト全体を踏まえた考察が深まれば、単なる現代語訳の古典学習からの決別が促されるかもしれない。しかし、そのような問題を古典に入れると、大問すべての構成にも影響が大きい。短い時間で多くの情報を処理しなければならぬ新テストにおいては、実現は難しいのではないだろうか。

■ 設問解説

問1 【傍線部における人物の心情を文脈に即して説明する問題】

(正答率50・1%) 正解は④

「心ひとつをかへさふ」の「心ひとつ」は、自分の心の中だけで密かに何かを考えている様子を表す。「かへさふ」は、ここでは「何度も思い返す、反省する」の意味で、傍線部Aの部分で浮舟がどういうことを思い返しているかという点、二行前の「かくてこそありけれ…」からの内容をすべて含んでいる。

この部分で浮舟が考えていることは三つである。

ア こうして生きていくことを薫に知られることは、誰に知られるよりも恥ずかしい。

イ それでも、この世にいる間に薫の姿を遠くからでも見ることがあるだろ

うかと思う。

ウ しかし、そんな執着をまだ持っているのは、よくない心だから、そのようなことは思うまい。

選択肢を見ると、①②は句宮に関する心情が書かれているので、まったく見当違いである。

③④⑤のうち、アウのどれかに合致するのは④しかない。したがって④が正解である。

問2 【語句の意味の問題】

(正答率 ア) 63・1% (イ) 28・8% (ウ) 34・7%

正解は (ア) ③ (イ) ① (ウ) ②

(ア) 「聞こし召す」は、「食う・飲む」の尊敬語で、敬語の問題では頻出の語であるから、さすがに正答率は60%を超えている。正解は③である。

(イ) 「こちなし」は、それほど頻繁に目にする単語ではない。一気に正答率が下がっている。もしかしたら、「こちたし」とよく似ているので、②の「おおげさだ」を選んだ生徒がかなりいたかもしれない。「こちなし」は、「無作法だ、無粋である」の意味の単語である。「こちなし」までの浮舟の状況は、「朝が来て、いびきの大きな年寄りの尼が早く起きて、粥など気味悪げなものを美味しそうに食べ、『姫様も早く召し上がりなさいませ』などと寄ってきて言うが、世話をされるのもいやな感じで、慣れない気持ちがあるので、『気分が悪いので』と素知らぬふりをなさるのに、強いて食べるように言うのかもしれない。『無粋で気が利かない』』というものである。したがって、正解は①である。

(ウ) 「さかしら人」も、「こちなし」よりは目にする単語であるが、やはり

り語彙力が豊かでないとなかなか答えられない。「さかしらなり」という形容詞は「賢しらなり」と書き、「かしこそうに見せる」「利口ぶる」という意味である。「さかしら人」とは「お節介な人、でしゃばり、差し出がましい人、利口ぶった人」の意味であるから、正解は②。

問3 【文脈に即して登場人物の言動を理解する問題】

(正答率 28・2%) 正解は③

適当でないものを選ぶ点に注意する。選択肢を一つひとつ本文と照合していかなければならないが、最初に本文の内容を把握できていれば、それほど難しくはない。

① 問2で解釈した通り、本文の内容に合致している。

② 「下衆下衆しき法師ばらなどあまた来て」以下の内容は、法師たちが「僧都が都の高貴な方々に何度も乞われて、都に行くため今日山を下りる」と自慢げに話すという内容になっている。したがってこの選択肢も内容に合致している。

③ 僧都が山を下りる理由を述べているが、僧都是一品の宮の祈禱をするのに、天台座主ではなく、やはり僧都でないといけないと繰り返し依頼され山を下りる。浮舟の出家のためではない。したがってこの選択肢は内容に合致していない。これが正解となる。

④⑤ いずれも内容に合致している。

問4 【傍線部について様々な視点から解釈する問題】

(正答率 32・8%) 正解は⑤

「親にいま一たびかうながらのさまを見えずなりなむこそ、人やりならずいと悲しけれ」を現代語訳すると次のようになる。

親にもう一度今のまま（出家前）の自分の姿を見せなくて終わってしまうことが、誰のせいでもなく自分のせいではあるが、とても悲しかった。

① 「すっかり容貌の衰えた今の浮舟の姿」が誤り。

② 「見られないように姿を隠したい」が誤り。

③ 「こそ」が強調しているのは、実の親に自分の出家前の姿を見せられない悲しさであるので、「実の親ではなく、他人である尼君の世話を受けざるを得ない浮舟の苦境」ではない。

④ 「人やりならず」の解釈が間違っている。「人やりならず」は、誰のせいでもなく、自分のせいだと思ふことである。したがって、「他人を責める」は間違った解釈である。

⑤ 浮舟には所々敬語が用いられている。したがって、ここでも「悲しけれ」と思ひ給ふ」と書くこともできたが、敢えて「悲しけれ」と結ぶことで、浮舟の心情がストレートに伝わってくる。したがってこれが正解。

問5 【他のテキストを踏まえ登場人物の心情を説明する問題】

（正答率30・8%） 正解は②・⑥

浮舟が独り言で言った「かかれとてしも」について、まず生徒が先生に質問をし、先生が僧正遍昭の和歌が引き歌になっていると答え、続いて遍昭集の歌集の詞書を紹介している。その内容は次のとおりである。

（詞書）なにやかやと歩き回っていた間に、お仕えしていた深草の帝が崩御なさって、変わってしまう世の中を見るのも耐えがたく悲しい。藏人の中将などになり、夜昼親しくお仕えしていたので、「深草の帝がいらいしやらない世の中で人と交わることはすまい」と思い、急に、家の人に

も知らせないで、比叡山にのぼって、髪を下ろし出家しましたが、そうはいってもやはり、親などのことは心にかかったのでしょうか。

（和歌）私の母はよもやこのように出家剃髪せよと言って、私の黒髪を撫でいつくしんだのではなかったらうに。

この詞書と歌の内容を踏まえて生徒の対話を読むと、解釈として適切なものはすぐに判別できる。正解は②と⑥である。

①、③、④は、歌の解釈が間違っている。

⑤は、浮舟の心情の解釈が遍昭の歌の内容にそぐわない。

第5問 漢文

■ 出典

金谷治訳注『莊子』

隆基 『郁離子』

■ 本文解説

文章Ⅰは「莊子」の「朝三暮四」の概要である。文章Ⅱは「郁離子」で、同じく狙と狙公の話であるが、内容は次のようなもので、まったく異なる。

楚に、猿を養って生計を立てる者がいた。楚の人は、彼を狙公と呼んだ。狙公は朝になると、必ず猿たちを庭でグループに分けて、年長の猿にグループを率いて山に行き、草木の実を探させた。狙公は猿たちが探してきた実の十分の一を徴収し、自分の暮らしをまかっていた。出さない猿がいれば鞭を与えていた。猿たちはそれに苦しむが、決して狙公の命令に背かなかった。あるとき、小さい猿が、猿の群れに向かって、

「山の木は狙公のものか」と聞くと、猿たちは「そうではなく、自然に生えているものだ」と答えた。すると、小さい猿は、「狙公しかそれは取ってはいけないのか」とまた聞いた。猿たちは「いや、そうではない。皆が取ってよいものだ」。小さい猿は、「それなら、どうして、我々は彼にそれを借りて、彼のために仕事をしているのか」と言った。小さい猿が言い終わらないうちに猿たちは目が覚めた。その夕方、猿たちは狙公が寝るのを待って、柵を破り、檻を壊して、狙公の蓄えを取り、一緒に林の中に入って行って、二度と帰らなかつた。狙公はどうとう飢えて死んでしまった。

郁離子が言うことには、「世の中には、術を使うばかりで、道理にかなった決まりを用いない狙公のような者がいるが、ただ民たちが疎くてこれまで気付かなかつただけである。そういう者は民が一度そのことに気づけば、狙公のように窮してしまふだろう。

漢文もテキストの種類は前回よりも減り、センター試験の形式に戻った感がある。設問も問5以外は、ほとんど字義や句法の知識があれば解ける問題で、従来通りの学習をしていれば十分対応できる。問5にしても、設問形式は新しさを感じるものの、読解に必要な知識・技能は、結局従来型の問題と大して変わらないと言つてよいだろう。

■ 設問解説

問1 【漢字の意味を問う問題】

(正答率) (1) 74・0% (2) 65・9% 正解は (1) (2) (4)

センター試験でもよく出る形式での出題である。文中の漢字の意味を、熟語によって明らかにするといふもので、(1) 「生」は「生計」の意味、(2) 「積」は「蓄積」の意味である。特に「生」が「生計」を意味

する場合は、漢文では頻出なので、覚えている生徒も多いと思われる。正答率も一番高い。

問2 【訓点と書き下しの問題】 (正答率 51・2%) 正解は①

読解のポイントとして次のことに注目するとよい。

- ア 「使」が使役形であり、「…をして、…しむ」という読み方になること(この点で④⑤は除外される)。
- イ 「率」はここでは「ひきキル」と読むこと(この点で②③が除外される)。
- ウ 「之」はここでは「ゆく」という動詞であること。

さらに、前後の文脈から、狙公が猿たちを山に行かせて木の実を取つてさせていたことが読み取れるはずである。

句法、文字の意味、文脈を読み取るという基本的な漢文読解のノウハウを用いれば、それほど難しい問題ではない。正解は①である。

問3 【書き下しと現代語訳の問題】 (正答率 33・8%) 正解は①

これも問2と同様、文字、句法、文脈の理解によって、読解できる。

- ア 「所」は返読文字である(この点で②④は除外される)。
- イ 「樹」は動詞となることがあり、「樹うる」と読む。
- ウ 「与」は疑問の助字で「か」と読む(この点で③⑤が除外される)。

さらに、狙公に木の実を搾り取られ苦しんでいる猿たちの中から、それに疑問を持つものが現れ、猿たちは山の草木が誰のものでもなく、ましてや狙公のものではないことに気づき逃げていくというストーリーを描けば、この

一文の意味はおのずと明らかになる。正解は①である。

問4【文章全体の内容を踏まえて文脈を読み取る問題】

(正答率32.9%) 正解は①

傍線部中に用いられている句法や文字の意味として知っておきたいものは、次のようなものである。

①惟…限定形「たゞノミ」と読んで、「くだけである」の意。

②昏…「くらシ」と読む。意味は次のとおり。

ア 明かりがなくて暗い様。「黄昏(こうこん・たそがれ)」は空が暗くなりかけた頃を言う。

イ 比喩的に「道理に暗い」「愚か」の意味。

愚かな王を昏君というが、「昏君」ともいう。

ウ 時世が混乱して混乱していること。混乱は昏迷とも書く。

③而…順接を示す助字。ここでは置き字で読まず、上の「昏」を「くらクシテ」と読む。

④未…再読文字。「未ダクズ」と読んで、「まだくない」の意。ここでは「惟」と一緒に使われているので、「未ダクズルノミ」となる。

⑤覚…「おぼユ」と読むが記憶するの意味はない。「感じる」「気づく」「悟る」の意味で用いられる。「覚醒する」という熟語を思い浮かべるとよい。

こうした漢文読解の基本的知識があれば、傍線部は、「惟だ其れ昏くして未だ覚えざるのみなり」と読み、意味は「ただ、(民が)まだ愚かで気がついていないだけだ」という意味になることがわかるだろう。これと同様の意味に訳しているのは①である。

これらの漢文の知識がなければ文脈から読み取るしかないが、傍線部の前後はかなり難しい内容になっている。

狙たちは山の果が誰のものでもないと思つかないうちは、狙公に言われるがままになっていたが、気がついたら逃げてしまった。つまり、それは民も同じで、民が術を使う者の言うがままになっているとしたら、それはまだ愚かで真実に疎いからにすぎないという内容であるが、これを語句や句法の知識なくして文脈から判断するのはおそらく不可能に近い。やはり基本的な知識はしっかりと身につけておくべきである。

問5【複数のテキストをもとにした対話の空欄を補充する問題】

(正答率 X51.4% Y37.5% Z36.7%)

正解はX⑤ Y③ Z①

文章Iはここで用いられているが、文章IIとの関係は、文章IIの「術」の意味を、文章Iの「朝三暮四」によって、口先で相手を丸め込み欺すという意味に解釈できるようにになっている。ある程度、複数のテキストを組み合わせてというねらいを実践した問題になっていると言えるだろう。

X 故事成語の知識があれば正解できるので、単なる知識問題になっている。しかし、正解の選択肢⑤が、「内容を改めないで口先だけでごまかすこと」となっているので、「朝三暮四」の解釈であるとすぐに気づかなかった生徒がいるかもしれない。「朝三暮四」は狙を見るか、狙公を見るかで、ことわざの意味が異なる。狙を見た場合、「目先の違いに気をとられて、実際は同じであることに気づかない」という意味になるし、狙公を見ると、「うまい言葉や方法で人をだますこと」という意味になる。選択肢⑤の「内容を改めないで」という部分に疑問を感じると、①を選んでしまう可能性があるだろう。また、「朝令暮改」と勘違いした生徒は②や④にしまったことも考えられる。平易な問題の割に正答率が半分程度であるのは、そのあたりに原因があるのだろうか。

Y 生徒Aが、Yを「運命の分かれ目」と言い、これによって猿飼いの親方と猿との関係が変わってしまったと述べている。とすると、文章Ⅱの読み取りから、小猿が「山の木の実は狙公が植えたものか」と聞いたことが、猿たちの意識を変えるきっかけになったことがわかっている。そこで、選択肢を見ると、③がその内容を的確に表しているの、これが正解である。

Z Zには、最後の段落で郁離子が述べた内容が入る。郁離子が言ったことは次のような内容である。

「世の中には、術を使うばかりで、道理にかなった決まりを用いない狙公のような者がいるが、そういう者は民が一度そのことに気づけば、狙公のように窮してしまうだろう。」

文章Ⅱの内容が把握できていれば、選択肢の内容が、郁離子の述べた内容に合致しているかどうかを吟味すればよい。正解は右の内容を的確に表している①である。

(平成三二年一月二五日)

【お詫びと訂正】

7ページ「第3問 文学的文章」の二冊の出典を「新潮社」としておりましたが、正しくは「思潮社」でした。お詫びして訂正いたします。

(令和元年八月二〇日)

本分析資料のほか、他教科・他科目の分析資料(PDF)もダウンロードできます。



第一学習社 広島本社

広島市西区横川新町七番一四号

TEL 〇八二一二三四一六八〇〇